

## 大草谷津田いきものの里 自然観察会

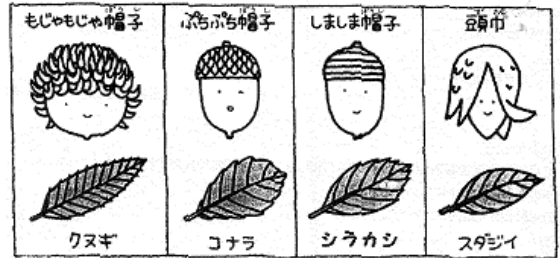
### ドングリ・木の実親子さがし

芳我めぐみ（千葉市）

日時：2010年10月3日(日)10時30分～12時 天候：曇り

参加者：大人13名 子ども8名 計21名

担当指導員：岡田敬子 芳我めぐみ



木の実の中でも 帽子(殻斗)をかぶったドングリは小さな子供にも馴染み深いものだと思う。落ちてい

ドングリを見つけ、親木を探すことはた易いのではないかと今回テーマに選んでみた。大草いきものの里で目にするドングリはコナラ・クヌギ・スダジイ・シラカシの4種だ。殻斗がフェルトのアカガシは観察路付近では見ることはできない。4種のドングリの見分け方を可愛いイラストで書かれたものを(以前観察会でもらっていたもの)家族毎に渡した。小さな子供の参加者にも一目でわかりやすいと好評だった。

スズメバチの危険シーズンなので子供さんにはくれぐれも目を離さぬようお願いして観察会を開始した。駐車場に接した林縁は観察しやすいのでまずそこでウォッチング。ドングリを豊富に付けたシラカシで早速イラストと照合。「しましま帽子だからシラカシ」「正解」入り口付近にドングリが多数落ちている。「ふちふち帽子だからコナラ」「それでお母さんの木はどこ？」コナラの葉の形、木肌を知っている大人の参加者が「これだ！」と傍らの見上げるような高い木を指差す。シラカシとコナラの親子はこれで判明した。林を抜けめじろんばでは必ず覗いて確認するのが習慣の「ヒカリキセルガイ」このところの雨のおかげで元気な姿を多数見られた。「もじもじや帽子と頭巾はないの？」つまりクヌギとスダジイはないのかと質問。田んぼへの道の林には両方あるがかなり高木で実がついているかは確認できない。足元にもそれらのドングリは落ちていない。クヌギの木肌を覚えてもらう。クヌギとスダジイのドングリは最後に見ることにして自噴井付近に向う。ナガコガネグモがあちらこちらで網を張っている。ベニシジミが網にかかりぐるぐる巻きにされるところに出くわした。クモの早業にびっくりしている。稲刈りの時に見つけたというウルリタテハの蛹が鳥の目に付かないよう稲に付けたままそっと置かれていた。成虫越冬する個体となるのだろう。地味な姿だけど白く見える突起は白銀色できれいだった。そのそばにナガコガネグモの卵囊も見られた。「この中にはたくさんクモの卵が入っているのよ」と説明するとこの日遠方から参加してくれた指導員の高山さんが「穴が開いているよ。もう出たあと」と訂正してくれた。本当だ。よく観察しなくてはいけないと反省。木の実で色付いているのはコバノガマズミぐらいでムラサキシキブやマンリョウ、アオキもまだ青い。これなら鳥は食べない。種子が熟すまでは目立たなくしている、これも植物の知恵。東邦大の実験田んぼまでやってきてやっとスダジイとクヌギを見ることができた。こちらのドングリはまだしっかり枝に付いて親子べったりの姿だ。熟すと親木から栄養がいかなくなり殻斗とドングリのへそ部分に離層が出来てコロコロと落下する仕組み。

最後に煎ったスダジイをひと粒ずつ配って試食。おいしいと言われると思ったら「まずい」の声。一人だけ気を使ってくれた男の子が「おいしいよ」確かに甘みを感じられない。クリのスプーンで(澱粉がないペタンコの実の頭に楊子をさしたもの)持参のドングリをすくって遊んでもらったがこちらは大好評だった。この他岡田さんが持参したボート型の縁に種子を付けたアオギリを高いところから落としてその様子を観察した。ドングリひとつとっても興味があることがたくさんだが、それ以上に生きものが目の前に次々現れる大草ではなかなか掘り下げての観察はむずかしそう。しかし楽しげにしている子供たちを見ていると、こういう観察会もありかな～と思った。

\*木下さん、高山さん、安全確認と昆虫の説明にご協力いただき、ありがとうございました。